

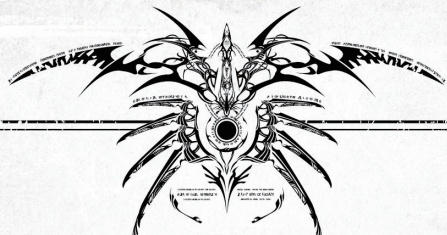


BLAZBLUE - ブレイブルー -

ブラッドエッジ エクスペリエンス〈上〉

原案・監修：森利道（アークシステムワークス）
著：駒尾真子

富士見書房



CONTENTS

プロローグ	—	再生	005
第一章	—	接触	008
第二章	—	不死	086
第三章	—	御剣	173
第四章	—	秘密	238
第五章	—	会敵	312
第六章	—	幕間	362
あとがき			375

BLAZ BLUE
BLOODEDGE EXPERIENCE



プロローグ — 再生



持ち上げた腕はひどく、ひどく重かった。

何故目を開いたのか、自分でもよくわからなかった。なにかを思つてのことだったような気もするし、そんな理知的なことではなくて、酸素を取り込むために口を開くような自然の反射によるものだったのかもしれない。

体を押さえつけるように覆いかぶさってくる冷たい瓦礫が、とても重くて。息が、できない。「っ、ぐ……」

吐き出そうとした息が肺で潰れて、代わりにぬるりとした液体がせり上がってきた。口から溢れて唇を、顎を濡らす。吐き気を誘う錆びた臭いがする。

零れ出た血は温かかった。それだけ自分の体は冷えていた。体がわずかも動かない。震えさえこない。どんどん、どんどん。沈むように自分自身が重くなっていく。

(こうやって……終わるのか……)

沈む思考が最後の身じろぎとばかりに囁いた。

自覚する。間近にちらつく死を。

濃紺の景色がやがて黒く塗り潰されていく。その中で思い浮かべたのは少女の顔だった。いつも側で世話を焼いてくれる、幼馴染みの少女の笑顔。
 (ああ……服、こんなに汚したら……怒るよな)

できれば怒らせたくなんかないんだけど。そんなことを思ったときだった。暗闇に沈みかけていた目の前で、風が吹き抜けた。

意識が微かに景色を取り戻す。

そこにいたのは、少女。

ただし思い浮かべた陽だまりのような幼馴染みの少女ではなく、こちらを冷ややかに見下ろす黒いマント姿の少女だ。

その姿に、ほっと息が漏れた。

無事だったのか。

眩こうと思った言葉は声にならず、喉の奥で掠れて消えた。

月のように白い爪先をこちらに向けて、少女は呆れたようにマントの下で肩をすくめる。その仕草がささやかながら不満で、死にかけた目に反感の色を灯す。

それを見て少女は微かに笑みを浮かべた。からかうようでもあり、どこか満足げにも見える表情で瞳を細めて、小さな唇で問う。

「……助かりたい？」

胸中でまた不満が首をもたげた。一体誰のせいでこんな目に遭っていると思っっているのか。

だがそんな思いはすぐさま別の思いに押しつけられた。

助かりたいか。そう問われれば答えは決まっている。イエスだ。

(帰らないと……あいつが、心配するから……)
 ほんやりと頭の隅で考えたことは、切迫した己の状況をどこか遠くに感じている、実に呑気なものだった。

見下ろす金色の瞳はそれすら見透かしていたのだろうか。また少し、薄い唇に笑みを刻んで、少女は瓦礫の山の前で身を屈める。

長いマントを割って白い膝が覗いた。眩しいほどの透ける肌に一瞬目が眩む錯覚を抱く。

同じ色の手が伸びてきて、瓦礫に埋もれる彼の頬に触れた。追いかけるように今度は少女の顔が近づいてくる。それはまるで口付けるかのような仕草だった。

距離を縮める唇はやがて触れるほどに迫り、そして囁く。

「なら、助けてあげるわ。その代わり……『蒼』を手に入れなさい。そして私を——」

重みに耐えかねて臉が下りる。次の瞬間、閉ざされた視界の外で鋭い痛みが走った。口から溢れた血が流れ滴る彼の首筋の辺りで。

その感覚を最後に彼は意識を失う。

闇に飲み込まれるようだった。底知れぬ深みに引きずり込まれるような、姿なき獣に飲み込まれるような。

けれどそれは不思議と心地いい、泥のような睡魔にもよく似ていた。

第一章 — 接触

1

どこか遠くで、けたたましい音が鳴り響いていた。

否応なしに気持ちが悪く、危惧感を煽るような音は、分厚い膜のようなものに向こうから聞こえているにもかかわらずひどくやかましく、耳障りだ。

眠るなら心地よい眠りを妨げ引き裂く目覚まし時計の音。それを嫌悪するこの気持ちを、誰がどれほどの強い語調で否定できよう。

ともかく一刻も早くこの耳障りな音から解放されたかった。

ゆえに彼は……黒鉄ナオトは自身を覆う分厚い膜、すなわち体温で程よく温められた布団の中から腕を伸ばし、頭上で騒ぎ立てる紛れもない目覚まし時計のスイッチをオフにした。楢田形のアナログ表示の時計だ。

「……馬鹿め」

軽い感触と共に、無情極まりない音は止まる。小さな悪を潰してやった気分だった。ささや

かな満足感を胸に、再び暖かい布団へと潜り込む。

だが即座にやってきた眠気に身を任せる間もなく、今度は部屋の外で玄関のチャイムの音が鳴り始めた。一度や二度ではない。何度も何度も。

うるさい。そう声に出す力もなく、ナオトは布団を頭から被った。こうすれば煩わしさはいくらか遠のく。だがそんなナオトの浅はかな抵抗を見透かしていたかのようにチャイムは音を止め、代わりに金属の擦れるような音がした。

鍵の開く音だ。

続いて玄関の扉が開けられる音がする。

(……またか)

誰かが家に入ってくる。

その気配を聴覚で拾いながら、ナオトは慌てるでもなくむしろ諦めの表情で、暖かい布団から這い出した。寝間着用のTシャツとジャージという格好でベッドから床に降りると、なるべくシンプルに設えた自室の真ん中で大きく体を伸ばした。

ナオトが住んでいるこの家はILDKのマンションだ。玄関から寝室まではほんの数歩で着く。まだ覚め切らない目を擦っているうちに、ぼやけた視界の中で部屋の扉がそとと遠慮がちに開かれた。

「あれ。なんだ、もう起きてたんだ」

扉の隙間から顔を覗かせて、ナオトを見つけたとたん残念そうに言ったのは、長い髪を白い

ヘアレッタで留めた少女だった。白地にブルーの広い襟が爽やかなセーラータイプの上着にブリーツスカートという制服姿で、胸元には赤いスカーフが下がっている。

彼女の名前は早見ハルカといった。ナオトの幼馴染みであり、同じ高校に通うクラスメイトであり……ナオトが住んでいるマンションのオーナーの娘でもある。

「あんだけチャイム鳴らしといて、なにが『なんだ』だ。そりゃ起きるだろ」

もともとチャイムが鳴っていた時点では起きるつもりなどさらさらなかったのだが、その件はなかったことにしておく。

ハルカは悪戯っぽく肩を持ち上げて笑うと、慣れた足取りでナオトの部屋へと入ってきた。

「だってあれくらいじゃ、いつも絶対起きないじゃない。でも残念。ナオトの好きなゲームの幼馴染みみたいだに『ナオくん起きて〜』ってゆさゆさしてあげようと思ってたのになあ」

「なに馬鹿言ってるんだよ。あれはテンプレなの！ 本物の幼馴染みがやることじゃねえから！ つか別に好きじゃねえから！ っ……え、ゲーム？」

まくしたてるように反論してから、ナオトは今しがた耳にしたハルカの言葉にきよんとした。まだ引き摺っていた眠気が完全に吹き飛ぶ。

なぜハルカは突然ゲームの話など持ち出したのか。

その答への代わりに、ハルカは少しからかうような目を向けてみせた。

「あ。『早く起きて、お兄ちゃん』のほうが好きだった？」

「ち……違う、あれは……！」

「いいのいいの、ナオくんも男の子だもんね。別に変なことじゃないよ。女の子がたくさん出てくるゲームとか、結構みんなやってるんでしょ？ でもなんていうのかな。あんまりゲームばっかりってのもちよつと寂しいというか……」

「おおお、俺が買ったんじゃないからな！ 福田が、あいつがやれっつて押し付けてきただけだからな！」

ナオトは大きく頭を振って否定するが、紛れもなく真実だというのにどうしてか浅い言い訳に聞こえて仕方がない。

「はいはい、わかってるって。ほら、着替え出しておくから顔洗っておいでよ」

「その言い方、絶対わかかってないやつだから！ あと勝手にタンスを開けるんじゃないー！」

母親のような態度でタンスに手を伸ばすハルカを、ナオトは慌てて遮った。声には未だ拭えぬ動揺がありありと表れている。

「き、着替えも自分で出せるから。頼むから向こうに行っなくてくれ」

「そう？ じゃあ朝ご飯の用意しておくね。二度寝しちゃだめだよ」

「わかってるって……」

軽い笑いを残して一足先に退室するハルカをいささかげんなり肩を落として見送り、それからナオトは言われた通り洗面所へと向かった。廊下のフロリングと洗面所の床は少しひんやりとしていて、駆け上がった冷気が背筋を伸ばさせる。

これがナオトの、いつもの朝の風景だった。

起きるのを渋るナオトに、大体最終的には鍵を開けて侵入し、強引に起こすハルカ。もうずっと続いている、あまりにも当たり前な光景だ。

(今日も特に変わりなし、か……)

たつぷり浴びた冷たい水をタオルで拭い顔を上げたナオトの鏡に映る姿もまた、いつもの朝と同じだった。

丹念に撫でつけても跳ね返ってくる強情な髪と、今ひとつ緊張感に欠けた呑気な眼差し。屈強とはお世辞にも言えないが、それなりに引き締まった体つき。

そして……鏡に反転して映る、頭上に浮かんだ一列の奇妙な記号。

それは数字だ。だが日常的にナオトが目にするような数字とは違う。ナオトが『それら』を『教習』と理解しているだけで、本当はもつと別の意味があるのかもしれない。

ただとにかくナオトには人の頭上に現れる奇妙な数字が見え、けれどそれは他の人の目には見えていない。その事実があるだけだ。

『「狩人の眼」……か』

まるで値札かなにかの番号のように自分の上に張りつく数字を見つめて、ナオトは苦々しく吐き捨てるように呟いた。

見える数字は『9810』だ。

それが正確な解読なのかどうかはわからないし答え合わせのしようもないが、ここしばらくのナオトの数値はいつもこんなものだった。

この数字は生命力だとか体力だとか、そういったものを意味している。

例えば格闘家とかスポーツマンとかは比較的高く、体を患っている人などは総じて低い。さらに日によって100前後変動することもあり、体調不良であれば低く逆に好調ならば高い。そんな具合だ。

読み取る数字が正しいかどうかはわからないのに、生命力を意味していると断言できるのには理由がある。ナオトはこの頭上の値が『0』になる瞬間を目撃したことがあるのだ。

それは目の前にいた人物が……彼の母親が、死んだ瞬間だ。

そのあとになが起きたのかも、彼は知っていた。

「ナオくん、ご飯できるよー!」

「ああ、今行く!」

リビングのほうからハルカの声が聞こえてきて、ナオトはタオルを傍らのタオル掛けに戻すと洗面所を出た。

部屋に戻って寝間着を脱ぎ捨て、大急ぎで着替えを済ませてリビングへ入る。と、その途端に寝起きの胃袋を刺激するいい匂いが漂ってきた。

小さなカウンターがついているキッチンに立っているのは、もちろんハルカだ。新川浜第一高校の制服姿でフライ返しを握り締め、焼きたてのベーコンエッグを白い皿に載せている。その傍らにはすでに薄く焦げ色のついたトーストが並んでおり、テーブルにはレタスとトマトとブロッコリーの盛られたミニサラダが用意されていた。

この短時間にどうやったらこれだけ手際よく朝食が用意できるのか、毎朝のことながらナオトには不可解でならなかった。

「はい、牛乳。早く食べないと遅刻するよ」

ベーコンエッグとトーストを載せた皿と一緒に、愛用のマグカップをいつもの席に手早く並べてハルカがせっつく。

「今日も朝から元気だな……」

ほやくように眩つらいて、ナオトは急せかされるまま食卓しょくたくについた。

いつもの癖くせで幼馴染わかなじの頭上を見やる。そこには例の、ナオトにしか見えない奇妙な数字が浮かんでいた。

見える値は『10500』だ。ナオトよりも数値が高いのはいつものことだが、今朝は昨日よりも50ほど高い。どうやら体調に問題はなさそうだ。

「ただだきます」

「はい、召めし上がれ」

絶妙ぜつぼうな時間に起こしてもらったために、朝食をいただく時間は十分にある。しつかり手を合あわせて軽く一礼すると、ナオトはありがたくも湯気のたつ温かい食事に手を伸ばした。

トーストにマーガリンを塗ぬりたくり、かぶりつく。毎朝の定番の味だ。

カリッと焼けたベーコンにくつついた目玉焼きは薄うすつすら半熟部分が残るナオト好みの仕上がりで、軟やわらかな黄身と白身が美味しい。ミニサラダにかかったレモンの香かほるドレッシングも爽さわ

やかで美味かった。

だがふと気づく。我が家の冷蔵庫にはドレッシングなどという高こう尚しょうなものが入っていない。たはずだ。

「なあ、ハルカ。もしかしてこれ、お前まへが作った？」

ナオトが尋ねると、朝食は自分の家で食べてきたのだろうハルカが正面の席うきで頷うなずいた。

「そりゃあもちろん。ナオくん、さっき目玉焼き焼やいてるの見てたじゃない」

「いやそうじゃなくて。これ、サラダのドレッシング」

これ、とナオトはフォークでサラダボウルと化した小皿を示す。

ハルカはもう一度頷うなずいて今度は笑った。

「あ、そっちなあ。うん、だってナオくんとこの冷蔵庫、それっぽいのっていったらマヨネーズしかないんだもん」

「はー……だったらマヨネーズかけときゃいいじゃねえか」

「別に大した手間じゃないし。あ、もしかして味、いまいちだった？」

「いや、すっげえ美味い。感動する」

「……ふひひ、よかった」

「なんだその変な笑い方」

照れなのか自慢なのか。気の抜けるハルカの笑い声に苦笑しながら、ナオトは改めてありがたい気持ちでもってトマトをフォークで刺さした。

毎度のことながらこの幼馴染みの料理技術には脱帽する。いや、料理のみならず家事全般において彼女の能力の高さには舌を巻くばかりだ。

こんなことだからナオトはハルカに頭が上がらない。ただでさえハルカの母、つまりこのマンションのオーナーである早見ユキには、叔母と甥という関係を理由にタダ同然でこの部屋を貸してもらっている。そのうえハルカは毎朝ナオトを起こしにくるだけでなく、夕食を作ってくれたり部屋の掃除をしてくれたりとかいがいしく世話を焼いてくれる。

生家を出て暮らし始めてはや数年、今やナオトの生活は早見親子なしには成立しない状況となっていた。

(甘やかされてるよな……)

トーストの最後の一口をもぐもぐとやりながら、ナオトは胸中で軽くため息をついた。

いつの間にか、こうしてハルカが用意してくれる朝食をなんの疑いも抵抗もなく腹に収めるようになった。そしてそのことを取り立てて問題視しようとする姿勢も、遠い日の感情となりつつあった。

結局のところ心地いいのだ。ハルカとその母親であるユキがくれる穏やかな日常が。

そんなことを思うと心底から感謝の念を覚えると同時に、やはり少々、甘えるばかりの自分が情けなくもある。

だとしてもこの温かな朝食の時間を手放すのはあまりに惜しく、ナオトはダイニングに流れる穏やかさと一緒にふた切れ目のトマトを噛み締めた。

ナオトとハルカの住むマンションから、ふたりが通う新川浜第一高校までは徒歩で三十分ほどかかる。

バスを使えばもつと遅くまで家でのんびりしていられるのだが、混雑したバスを嫌い、逆に人が行き交う繁華街を好むナオトは当然徒歩での通学を選んだ。

ハルカも一緒に出かけて一緒に歩いて通っている。なにもこちらに合わせることはないのだからバスを使えばいいのに、と何度かナオトは言ったが、ハルカはそのたびに健康にいいからと笑ってついてくる。といっても下校時など一緒に帰れないときは迷わずバスを使っているらしいから、彼女の言う『健康』はずいぶんと自由度があるようだ。

集合住宅の多い住宅街を抜けて、最寄りのコンビニエンスストアの前で青信号を待つ。十月の始め。数日前まであった夏の名残ももうほとんど薄れて、朝の涼しい気温には衣替えしたばかりの制服がちょうどいい。

抜けるように晴れた空には薄く伸びた白い雲がかかり、見上げるとなんとなくのどかな気持ちにさせられる。そのどかさに誘われて込み上げてきた欠伸を噛み殺していると、さつきか

ら妙にそわついていたハルカが覗き込むようにして見上げてきた。

「あのさあ。話は戻るんだけど、ナオくんはああいうのやつぱり……好きなの？」

「は？ ああいうの？」

なんのこともかわからなくて、ナオトは目尻を親指で擦りながら聞いた。

とたんにハルカの目が狼狽したように左右に彷徨う。

「だからえっと、ほら。あの……ゲームの、ピンクの髪の子が主人公にしてあげてたみたいな？ お風呂場で——」

「ごによごとよと言ひ淀みながらハルカが続けた言葉に、ナオトの血の気が音をたてて引いていく。

視界の端で信号が青に変わる。

だが咄嗟に足が出ない。

「は……ハルカ、さん？」

「あ、ナオくん青だよ」

こつちの気持ちも知らず、ハルカは呑気にナオトの袖を引く。

促されてなんとか足を動かし、ぎこちなく横断歩道を渡った後で。ナオトは弾かれたようにハルカへ向き直った。

「なんでそんな細かいとこまで知ってたんだよ!？」

「わあっ、びつくりした！ あー、いやその、ナオくんがどんなものに興味があるのかなあと

思ってたね？ それに何本もあったから、ひとつくらいならいいかなって……」

肩を跳び上がらせたハルカは、胸の前で指先を組んだりほいほいたりしながら弁解する。

多少の後ろめたさは感じているらしい。ただしハルカが感じているのはナオトの私物に無断で手を出したという点であって、先ほどの発言によってナオトの心を脅かしたことでないことは、確認するまでもない。

「ほら、私としてはね、ナオくんの日ごろの行いとかなにに興味があるのかとか、そういうことをきちんと知っておかないといけない義務がありますよ」

「どんな義務だよ！ つかなくて急に敬語なんだよ！」

「あ、あはは、それは色々立場があると言いますか。乙女の秘密と言いますか……あ、そうそう。『らぶらぶ学園パラダイス』なら青い髪の子が可愛くておすすめだよ！ 『お姉ちゃんといっしょ☆』ならヒロインの子が……」

「ひとつじゃねえじゃねえか、がつつりやつてんじゃねえか！ あと話を逸らすな！ 逸れてもねえし！」

ハルカの話を通り事細かにツッコミを入れるナオトの語調は、これ以上は勘弁してくださいと懇願するかのようだった。なにが悲しくて家族も同然の幼馴染みから隠し持っていたゲームのおすすめを聞かなければならないのか。

だがそんなナオトの思いを知ってか知らずか、おそらく知らずにハルカは肩を狭めると、妙に改まった様子で窺うようにこちらを見上げた。

「あの、ね。私は別に、ああいうのに興味津々ってわけじゃないんだけどね。ただナオくんがああいうのが好きだっというなら、私も……」

「『ああいうの』って連呼するのやめてもらえませんかハルカさん……！ あとなあ、何度でも言うけどあれはあくまでゲームであって——」
 まだこの話題続くのかよと泣きたい気持ちを抱えて叫び、言いかけて……ナオトは続けるはずだった言葉に詰まった。

狼狽えた視線が見ているのは、どこかにはかむように覗き込むハルカの瞳ではなく、彼女の頭の少し上だ。

数字が動いた。1.2 上昇した。

その些細な変化に、ナオトはなんともいえない気まずさを覚える。

頭上の数字は生命力を表している。けれど体調だけでなく感情の起伏によってもわずかに変動することを、ここ一年くらいで知った。

下降させるのは悲しみや恨みや自棄や辛さ。

上昇させるのは喜びや幸福感、ときに怒りや焦り、それに……好意や恥じらい。

なるべく気にしないように、見ないようにと気を付けてはいるつもりだった。けれどそれでも、嫌でも目に入ってしまう。見えてしまう。

ナオトはハルカから逃げるように目を逸らした。

自分は決して他者の気持ちを探るのが得意ではない。どちらかという鈍いほうだ。

だというのが数字の変動などという、どこか機械的なもので相手の心の揺れ動きを見てしまうのは……なんだかとても居心地が悪い。どう受け止めていいのかわからない。

通学路の景色は、自宅と学校の間にある駅近くの繁華街に変わっていた。

進むにつれて徐々に人通りは増えていき、やがて一番人通りの多い大きな交差点付近に差し掛かると、ふたり横に並んで歩くにはいささか不自由するほどの賑わいになる。

ナオトは会話をうやむやに途切れさせて、いつもそうしているようにハルカの前へ出た。ハルカも自然と後ろへ下がりはぐれないようにとナオトが肩に担いだ鞆を軽く握る。

微かに肩に重みを感じる。これがハルカがきちんとついてきている合図だった。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

いつものように念のため一回振り返って確認する。見上げるハルカが笑顔で頷く。五分も歩けば人の流れも落ち着いてくる。それまで下らない話は中断だ。

だが車道を横切り交差点を通り過ぎたところで、唐突にナオトはそれまで肩に感じていた小さな重みを失った。

「ん？ なんだよ？」

ハルカが鞆から手を離れたのだと思った。だがナオトが怪訝に思っただけ振り返ると、そこにはハルカの姿はなかった。

いや、ハルカの姿だけではない。

誰の姿もない。

さつきまであれだけ溢れていた人も、信号が変わるのを待つ車も、電線に止まるカラスすら姿を消し、あらゆる生命を失った空っぽの繁華街が空虚に広がっている。まるで映画のセットの中に取り残されたかのように、いるのはナオトひとりきりだ。

「……おい？ ハルカ？」

白昼夢、という言葉がナオトの頭に浮かんでいた。

これは一体全体どういうことなのか。まさか人ごみの中を歩きながら寝てしまったなんて馬鹿なことがあるはずない。だからといって、振り返ったら突然あらゆる人が消えて自分ひとりになっていたなんて大馬鹿なこと、もつとあるはずがない。

ここが映画のセットなら、ジャンルはたぶんホラーだろう。そんなことを考えながら、汗ばむような緊張感を背中に感じつつナオトは慎重に辺りを見回した。景色を回転させながら、ゆつくりと後ろを振り返る。

その瞬間、息が止まった。

誰もいない無人の繁華街。その向こうにひとりの少女が立っていた。

さすがの演出だ、ホラーのお約束ってやつをわかっている。

事態を理解できないまま呆然とふざけた感想を抱きながら、ナオトはまるで縫い留められたかのようにその少女から視線を外せなくなっていた。

距離もある。なにより少女の向こう側から光のようなものが差していて、彼女の姿の詳細ま

でははつきりと確認することはできなかった。

だが長く美しい金髪を左右で束ねていること、たつぷりとした黒いドレスを着ていること。背格好は十二歳くらい。けれどその外見にあまりに似合わない、独特な雰囲気を感じていることはわかった。

肌は透けるように白く、こちらを見据える瞳は血のように真っ赤だ。なんて美しい瞳だろう。咄嗟にそう思った。

けれどなによりナオトの目を引き付けたのは、長い髪を束ねるリボンだった。黒く大きなリボンはピンと立っていて、そのせいで少女のシルエツトはまるでウサギのようだ。

ウサギの少女はとても悲し気な表情をしていた。誰かの未来を憂えるような、あるいは誰かの面影を思い起こしているかのような……そんな眼差しだ。

切なさとも呼べる悲しみを湛えて、少女は真っ直ぐ、その真紅の瞳でナオトを見つめる。誰だ？

ナオトは問おうとした。けれど声が出ない。体を動かすこともできなかった。

ただ、どこかでこの少女を見たことがあるような気がしていた。

それはひどく遠く薄く、今にも掠れて消えてしまいそうな感覚で、どこで会ったのかと記憶を探るにはあまりにあやふやな既視感だ。けれど自分は……この少女を知っている……のではないだろうか。

君は誰だ。もう一度問おうとした。

だがそれを遮るように、少女の小さな唇が動く。
 なにか呟いたようだった。ため息にも似た短い言葉はナオトまで届かず、彼女がなにを言ったのかはまるで聞き取れない。

けれどそれはとても重要な予言だったように思えて、ナオトは身を乗り出そうとする。よく聞こえない。もう一度言ってくれ。そう言おうとして……。

どん、と小さな音をたててなにかが背中につかった。

「わぶ」

すぐ近くで聞こえた声に、はっ、とする。

その一瞬で、ナオトの周囲に雑踏が戻ってきた。いや、ナオトの意識が雑踏に戻ってきたというべきなのかもしれない。

気が付けば周囲は行き交う人で溢れていて、ナオトはその中で呆然と立ち尽くしていた。

突然足を止めた学生に、何人かの大人が怪訝そうに視線をくれては、どうでもよさそうに通り過ぎていく。

ぽかんと口を半開きにしたまま突っ立っているナオトを、すぐ後ろにいたハルカが心配そうに眉根を寄せて覗き込んできた。

「どうしたの？ 急に止まって」

さつきナオトの背にぶつけたのだろう。おでこを軽くさすっている。

どこか小動物的な丸い目を見返して、ナオトは自分がここにいることを確かめるように髪に

手を突っ込んで頭を掻いた。

「いや……」

今、そこに女の子がいなかったか。そう聞こうとしてすぐにやめた。女の子のことはもちろん、さつきナオトが体験した異常現象をどんな言葉で説明したところで伝わるとは思えない。

すぐ後ろを歩いていたのでだろう。スーツ姿の男性が、急に止まったナオトを迷惑そうに横目に見ながら急ぎ足で追い越していく。

辺りはすっかり日常の顔だ。異変のことなど、誰も知らない。

「なんでもない」

そうだ、なんでもない。結局小さな女の子がこちらを見てただけで、とんでもないハプニングが起こったわけでもない。気にするほどのことではない。ない、はずだ。

何度かそう自分に言い聞かせて、ナオトはひとつ息を吸い込む。

「行くぞ、ハルカ」

「うん……でも大丈夫？ 具合悪いかじゃない？」

「大丈夫だって。なんか急に眠くなって、寝そうになっただけだから」

表情を曇らせて覗き込んでくるハルカに、ナオトはいかにも眠そうな顔を作ってみせた。ハルカに心配をかけるのは、いかなる事情があろうとも本意ではない。

「寝そうって、歩きながら？ ちょっとナオくん、それ全然大丈夫じゃないよ、危ないよ」

「わかってるって。だから起きただろ」

「そういう問題じゃないでしょー。もう、朝のナオくんは本当に心配だなあ……」
肩を下げて見るからに心配そうにするハルカに、ナオトは軽く肩をすくめて苦笑する。

「あのな……お前は俺の母親かよ」
むしろこんな雑なごまかしを真に受けてくれるお前のほうが心配だ。という本音は、ハルカに余計な心配を重ねさせるだけだから胸の内にしまっておく。

「んー、母親ってのは、ちよつと本意じゃないんだけどなあ」

「なにが本意だよ。ほら、さつさと行くぞ」
いささか不満げな顔を見せながら再び鞆に掴まるハルカを待って、ナオトは改めて人波を掻き分け足を進めた。

一歩目を踏み出したところで、ふと気づく。

あの少女。どこか妙だと思っていたら……。

(数字がなかったな)

生命力を示す頭上の数字。

誰かの数字が見えなかったことなど、今までなかった。あるとすれば……そう、夢の中からのものだ。

(てことは、マジで俺、寝てたのか?)

確かに自分は朝に弱いが、まさかここまで重症とは。無意識にもう一度頭を搔いて、ぼやきの代わりにため息をひとつつく。

夢ならそれでいい。夢なら、どんな不可解だってあり得るではないか。

だが寝ぼけていたのだという言い訳で片付けようとさつきからずつとしているのに、いつまでたつてもナオトの頭はさつきの少女の面影を脳裏に焼き付けたままだった。

2

日が昇り昼が近づき、日差しが本格的に照り始めると、秋とはいえ新川浜高校の教室は夏を思い出させる熱気を孕む。

二時間目の現代文の授業が終わった後の休み時間。教室の前方で誰かが炭酸飲料を開けた爽やかな音を聞きながら、ナオトはさすがに暑くて上着を脱いだ。それを雑に椅子の背もたれへ預けたところへ、足取り軽く近づいてくる男の姿が目に入った。

「んっー、黒鉄くん。ちよつといいかね」

ナオトの席のすぐそばまできてわざとらしい咳払いで切り出したのは、クラスメイトであり中学時代からの友人である福田シンノスケだ。

短く切った髪は誰かに言わせると清潔そう、また誰かに言わせると馬鹿っぽい、そんな評価をクラス的女子から受けている。ナオトも人のことは言えないが緊張感のない風貌をしており、

シンノスケの場合はそれが心根から溢れる平和な人柄ひとがらによって強調きょうこうされていた。背はナオトとほぼ同じくらい。成績も似たようなものなら、趣味嗜好しゆみしこうも遠くない。なにより馬が合う。

そうやって築かれた悪友としての絆きずなは、そういえば今朝、小さな事件を生み出したのだったとナオトは思い出した。

「てめえ、シンノスケ。お前のおかげでひどい目にあっただからな……」

なにが悲しくて家族同然の幼馴染わかなじみに、ゲームに出てくるイベントの好みなどを調査されなければならぬのか。

「ひどい目？ なんだそれ」

恨みを込めて見上げるナオトを、シンノスケは微塵みじんも悪びれた様子なく、むしろ気のいい笑顔で見返してくる。

一瞬、あらいざらい説明して糾弾きうたんしてやろうかと思ったが、そんな気は瞬時しゆんじに散った。

笑われるだけだ。なにより、己の情けなさを露呈ろうていする結果しか生まない。

「……なんでもない。説明したくねえ」

「そうか？ まあいいや、それより黒鉄くんよお。どうだったね、貸した『教材』は。参考に……」

教材ときたか。ナオトの口から乾いた笑いが漏れた。

「いや、まったく」

むしろ押し付けられるようにして貸し出されたゲームでなにかを学習したのは、自分ではなくハルカのほうだったのかもしれないと思う。が、それは今、言うまい。

「ただああいうのがファンタジーでしかないんだってことは、理解したな」

渋い顔でナオトが首を横に振ると、心底心外だとばかりにシンノスケは大きく目を見開いてみせた。

「なに言ってたんだ。そのファンタジーみたいな生活してるやつが」

「は？ お前こそなに言ってたんだ」

「おい正気か？ 冷静になればよナオト？ 叔母おばさんのマンションに部屋借りてひとり暮らし。毎日従妹でもある幼馴染みが朝起こしにきて朝飯作ってくれて、帰ったら帰ったで晩飯を一緒に食って……そのどこがファンタジーじゃないって言うんだギヤルゲー男！」

「やめるその呼び方！ 定着したらどう責任取ってくれんだ！」

ずいっと身を乗り出し、ぐっと拳を握り締めて熱弁を振るうシンノスケ。それを押し返す勢いでナオトもまた心外だと言い返した。

だがシンノスケはそんな程度の抵抗で引き下がるような男ではない。伸ばした両手でナオトの頭を掴むと、強引きやういんにあらぬ方へと……教室の前方へと顔を向けさせた。

「ぐえっ……」

「よく見る、ナオト」

いやに真剣な声でシンノスケが言う。奴やつに向けさせられた先には、一番前の席で友達と談笑

しているハルカの姿があった。

ナオトの頭を掴んだままで、シンノスケはなお声を低めて強い語調で続ける。
 「優しく穏やかな性格、生徒会役員に選ばれる人望、けれどいつだって親しみやすさを忘れな
 い包容力。さらに特技は家事全般、特に料理はべらぼうに美味い。美人ってわけじゃないが、
 清楚で可愛い容姿。胸は平均以上……！」

「おいてめえ。どこ見てんだ」

「そのうえ母親はマンシヨン一棟所有してる資産家で、おまけにすげえ美人、かつ巨乳！こ
 れで間違いが起らないわけがないだろうが！」

「声でくださいねだよ！」

耳元で叫ぶシンノスケの手を振り払って、ナオトは慌てて友人の落着きない口を塞いだ。
 案の定、声が聞こえたらしいハルカがこちらを振り向いて小首を傾げた。すぐになんでもな
 い、と手を振ってナオトが身振りで伝えると、納得したように頷いて友人との談話に戻る。

それを見届けてから、ナオトはシンノスケの呼吸を解放した。

「ぶはあ……っ……おまつ……ちよ……」

どうやら本当に呼吸を妨害していたらしい。いつもより僅かに深刻な顔色になっていたシン
 ノスケに、ナオトは簡素に謝った。

「あー、とにかくだ。お前は自分の恵まれていた環境をもう少し自覚するべきだと思うね。そ
 のうち恵まれない男子にぶん殴られるぞ」

「例えはお前とか？」

「おう、望むところだ」

振り向いて見下ろすシンノスケの目は思いの外に真剣だった。ナオトは即座に茶化した笑み
 を引つ込めた。

そのまま頬杖をつき、なんとなく再度ハルカを見やる。

あちらはずいぶんと明るい話題で盛り上がっているようで、高校生男子には少々近付きにく
 い華やかなはしゃぎ声がかつちにまで聞こえてきていた。

楽しそうに笑っているハルカは、確かにどちらかというところと整った容姿をしている。以前にシ
 ノスケから聞いた話によれば、クラスメイトのみならず先輩や後輩の間でも可愛らしい女子
 として名が広まっているらしい。中には本気で恋人の座を狙っている者もいるとか。

だがナオトには、今ひとつハルカがもてはやされる理由が理解できずにいた。

（あれが可愛いのかねえ……）

ナオトにしてみれば、可愛いなどと思うより先にお節介だとか口うるさいだとか、あるいは
 放っておけないだとか心配だとか、そんなことが気持ちを埋める。

同い年の女子というより、むしろ母親に近い。

そんなハルカを相手に、シンノスケの言うような『間違い』など起きるはずがない。そもそ
 もそんなこと考えたこともなかった。

（そういえばユキさんもしよっちゅう言ってくるよなあ）

思い出してしまつて、ナオトは複雑な思いそのままに眉間にしわを刻む。

ハルカの母親であるユキといえは、ナオトにとつてはハルカよりも頭が上がない人だ。仕事^{いそが}が忙しく家に帰ることも少ないため、顔を合わせるのはごくたまになのだが、そのたびに彼女は含みのある笑みを浮かべてナオトに迫る。

いつになったらハルカに手を出すのか。さつさと襲^{おそ}っちゃえよ男の子でしょうが。等々。

（つたくどいつもこいつも。てかユキさんはいいつの母親だろうが。自分の娘^{むすめ}に手え出せとか、普通の母親^{ふつう}だったら言わねえぞ。なに考えてんだか、まったく）

ぶつぶつ内心でぼやいていると、傍^{たわ}らのシンノスケが「お」と短く声を上げた。

その声でナオトも気づいた。休み時間の終わりを知らせるチャイムが鳴っていた。

ハルカも時計を確認し、会話を切り上げて自分の席へと引き返す。その際、こっちへ目をくれると人懐^{ひとなつ}っこく笑つて軽く手を振つてきた。

悪い気はしない。ナオトが苦笑を返すと、横ではシンノスケがほのかな妬^{ねた}みの視線を送つていた。

だがシンノスケがなにか茶化す前に、几帳^{きようちやう}面なほど時間びつたり教室のドアが開けられた。入つてきたのは次の授業である地学の担当教師、伊佐タダユキだ。

背は高くないががちりとした体格をしており、肉付きのいい丸顔には常に気難しそうなしなめかめつ面^{つら}が浮かんでいる。歳^{とし}は確か四十代半ばだったはずだ。古めかしいデザイン^{デザイン}の四角い眼鏡をかけており、いつも同じような服装をしていてあまり身なりに気を遣^{つか}っているタイプで

はない。

地学の他に生活指導も担当しているが、口うるさく批判的な性格のせいであることに生徒から悪評を買っている教師でもあつた。

シンノスケもまた伊佐を苦手とするひとりだ。彼の姿を目に留めるや否^{いな}や、目をつけられてはかなわないと身を翻^{ひる}すようにして席へと戻つた。

そんな慌てて居住まいを正す生徒たちをひとりひとり確認するようにたるんだ瞼^{まぶた}の向こうから睨^{にら}みつけて、伊佐は出席簿^{しゅつじきぼ}と教科書を荒^{あや}つぽく教卓^{きょうたく}へ置く。

それはなにも珍しい光景ではなかった。週に二度ほどやつてくる、憂鬱^{ゆううつ}な授業の始まりだ。だがナオトは……本日二度目になる驚愕^{きょうがく}に目を瞠^{まは}つた。

（なんだ……あの数字？）

見聞^{みまが}違いではないだろうかと何度も瞬^{まばた}きを繰り返してみたが、皺^{しわ}の深い中年男の頭上でラベルのように張りついている数字は変化しない。

『925』。こんな数値は日常ではまず目にしない。あまりにも低すぎる。

「黒鉄！ 教科書もノートも出さんとどういう了^{りよげん}見だ！ もう授業は始まつてるんだぞ！」

「あ……は、はい！」

太い指で指され叩^{たた}きつけるように怒鳴^{どな}られて、ナオトは我に返つた。鞆^{たね}の中から教科書を引きずり出して机の上に広げる。

それを見届けて、伊佐は万全の準備を整えて事に臨まないことがどれほど愚^{おろ}かなことかとい

う講釈を一通り語ったのち、重々しく高圧的な調子で授業を始めた。教科書をひしゃげさせて手に持ち、チョークの先端が碎けるほどの強い筆圧で読みにくい癖字を書く。暑がりなのかしよっちゅうハンカチを取り出しては額に浮かぶ汗を拭う姿は、いつもの授業風景と特に変わったところはない。

けれどナオトの胸中はざわついていた。元々大して興味をそそられない授業だが、今日はまったく伊佐の声など耳に入っていない。

(925? 冗談だろう……大学病院の入院患者だってもっとまともな数値してるぞ) 自分の目がおかしいのだろうかと思った。だが教室中を見回してみても、伊佐以外に異常な数値を示している人物はいない。

特定の個人の数値だけ正常に見えないなんて不具合があるだろうか。

(どうなってんだ……?)

ナオトは自分の目を手の平で覆った。

それがいけなかった。

「黒鉄!!」

再び飛んできた怒声に、教室中が緊張する。

ナオトが何事かと顔を上げると、教卓の前から伊佐がものすごい形相で睨みつけていた。

「貴様、この俺の授業で居眠りとはいいい度胸だな……っ」

「いや、寝てたわけじゃ……」

「口答えをするな!」

一層の圧力を持つて伊佐の声が飛んでくる。ナオトは内心でしまったと己の失敗を悟った。機嫌の悪いとき、伊佐はとにかく意に沿わない生徒の発言を嫌う。いっそ憎んでいると言ってもいい。

本日の伊佐の虫の居所はこれまでになく悪いらしかった。分厚い手で握り締めていた教科書を教卓に叩きつけ、その手でナオトを指差す。

「今の質問に答えてみる。寝ていたわけじゃないなら、わかるはずだ」

うつ、とナオトは言葉に詰まった。寝ていたわけではないが、伊佐の話はまるで聞いていなかった。もちろん質問がどんなものだったのかもわからない。

「すいません、わかりません」

聞いていませんでした、と素直に認めるのもなんだか癪で、ナオトはなるべく感情を抑え込んで平静に答えた。

とたんに伊佐が口元を歪め、憤りと優越感を同時に湛えた眼差しを向ける。

「そらみる。だから貴様はいかんだ。代わりに……早見。答えろ」

「は、はい」

少しの驚きを含めて答えるハルカの声に、ナオトは反射的に軽く眉を寄せる。自分の代わりにハルカが指名されたのはなにも作為的なことではなかっただろうが、まるで飛び火させてしまったようで後ろめたい。

「火山活動によるもの……です」

「そうだ。さすがに早見はよく勉強しているな。座っていいぞ」
妙に嬉しそうに言って、伊佐は大きく頭を縦に動かす。

その姿にまたナオトは眉間に皺を作らなければならなかった。
(数字が……)

増えた。しかも一気に70もだ。生徒が自分の質問に答えられたから喜んだ、にしては変動が大きすぎる。

「それに比べて黒鉄、貴様は……」

厳しく語調を強めて、伊佐は改めてナオトのほうを振り向いた。頭の上の数字がまた増える。今度は37の上昇だった。

振れ幅がいささか大きすぎやしないだろうか。あまり日常的に見る数値の変動ではない。

伊佐はナオトを指差し睨みつけ、分厚い唇を忙しく動かしていかにナオトが駄目な人間であるかということ語る。普段ならその一方的な物言いに不満と不快感を抱き、だが反論を挟めばもつと話が長くなるからと仕方なく口をつぐんでいるところだ。

けれどナオトの聴覚は伊佐の言葉などまるで気に留めず、ただまじまじと教師の頭上で忙しく1や2の増減を繰り返す数値を見つめ続けていた。

不可解だ。なぜこんなことになっているのか見当もつかないが、嫌な違和感が内心でべたついていて、それが不快でたまらなく、ナオトは思わず口を開いた。

「伊佐先生。どこか具合でも悪いんですか？」

一瞬しんと教室が静まり返った。ただでさえ伊佐の説教タイムで息をひそめていた誰も彼もが、完全に息を止めたのがわかった。

やがて教卓の上で握った拳をぶるぶると震わせて、伊佐の顔色が募る怒りに真つ赤になっていく。

やっちゃまった。ナオトは遅れてやってきた後悔に思わず頭を抱えた。

伊佐が握り締めた拳で荒々しく教卓を叩く。

「お前のせいだ、黒鉄!!」

張り上げられた憤怒の声に辺りの空気がびりりと痺れる。そのまま殴られるのではないかと思った。

が、身をすくめるようにして肩を持ち上げたナオトの耳が、妙な音を拾った。

——キチチ。

ゼンマイを巻く音に似ているだろうか。だがもつと不快で、生物的な音だった。

本能的に覚えた嫌悪感に一瞬鳥肌がたつ。なにかいるのか。嫌な気配にぞつとしながらもナオトが思わず顔をしかめたところで……授業終了を知らせるチャイムが鳴った。

「来週までに火山活動によってもたらされるものについて、各自最低でも二種類は調べておくように。次の授業で聞くからな」

そう言い残して、伊佐は急ぎ足に教室を出て行った。

肩をいからせた伊佐が教室の扉の向こうに消える直前、最終的にナオトが目にした彼の数値は『1007』だった。自分の足で歩ける人間の数値としては、やはりあまりにも低い。

「っはー……」

教室内にあったさつきまでの息苦しい空気は、伊佐の退場によって終わりを告げた。にわか
に普段通りの調子を取り戻すクラスメイトたちの声を聞きながら、ナオトは机に突っ伏して深
く息を吐き出す。

頭の中は釈然としない思いでいっぱい、なんともいえずすっきりしない。

癖の強い髪に手をつ込んでわしわしと荒っぽく掻き回した。もやついた気持ちのときにっ
いやつてしまふ、昔からのナオトの癖だった。

「ばつかなあ、伊佐が説教モードのときに口挟むなんて。あいつ、完全にお前のことロクク
オンしてたぞ」

駆け寄ってきたシンノスケが呆れた顔で言う。多少不満げなのは、ナオトの巻き添えで余計
な課題を与えられたことに対してだろう。それについては、ナオトは謝るしかなかった。

ナオトは髪に手をつ込んだままで顔を上げる。と、シンノスケの横には心配そうに表情を
曇らせたハルカが立っていた。

「ナオくん、なんだか今朝からぼーっとしてない？ 寝不足？」

「いや、そうじゃねえんだけど……まあ」

なんと答えたものか。ナオトは言葉に迷う。

ハルカもシンノスケも、ナオトのこの不思議な目——『狩人の眼』のことは知らない。無論、
話すつもりもない。だから頭の上の数値がどの、などとはとても言えなかった。

ただどうしても気になって、確認するような気持ちで目の前のふたりに問うた。

「あのさあ。今日の伊佐、なんか変じゃなかったか？」

「そうか？ いつもと一緒だったろ」

すぐさま返ってきたシンノスケの答えはあっけらかんとしたものだった。ナオトは口の端で
苦笑する。そもそもシンノスケは伊佐の様子どころか、授業内容すらまともに覚えていないに
違いない。この男は自分に非常によく程度が似ているのだから。

正直なところ呑気な悪友には初めから期待していない。ナオトは横目にハルカを窺う。

と、ハルカは困ったような顔つきで、考え込むように小さな顎に指を添えて俯いていた。

「……変ってほどのことじゃないんだけどさ。さつきナオくんの次に当てられたとき、伊佐先
生なんだか目が泳いでたんだよね」

「そう……だったか？」

「うん。じつと見てたと思つたら、急に目を逸らして、またすぐ戻ってくる……みたいな感じ
で。それに目は私のほう向いてるんだけど焦点は合っていないような感じがして。ちよつと変だ

なつて思った」

やや自信なさげなハルカの言葉を聞きながら、ナオトは頭にあつた手を頬杖に変えた。自然と目が窓の外へ行く。

数字の見えていないハルカも感じた、伊佐の違和感。見間違いかもしれない。勘違いかもしれない。むしろそう考えるのが至極自然なことにも思える。

だけどこの違和感はまだで不吉な胸騒ぎのように、ナオトの神経を煩わしくピリつかせた。

3

放課後。新川浜第一高校から自宅であるマンションへ向かう帰路を、ナオトはひとり歩いてた。

いつもなら一緒に下校しているハルカは、急ぐからと先に帰った。それに同行しなかったのは、些細な用事があったからだ。

帰宅する際、ナオトは職員室に立ち寄った。

目的は伊佐だった。もう一度、頭の上の数字を確認したかった。だがナオトが行ったとき伊佐はすでに帰宅しており、校内のどこにも姿はなかった。

それらしい理由もないのに、一生徒が教師の住所だの帰宅順路などを聞いても教えてもらえないはずがない。なによりそこまでしななければならないことかと思ひ、仕方なく諦めてナオトはいつもより少し遅くに校門を出た。

通学路の途中にある繁華街へ向かう道を、のろのろと歩く。

日は西空を塗りたくったような茜色に染めていた。二期が始まった直後に比べると、ほんの少し日が短くなった気がする。

だがナオトの意識は徐々に夏から遠ざかる日の長さでも、鮮やかに景色を染める夕日でもなく、もつと別のものに捕えられていた。

『621』。

いつもなら極力、あの数字のことは気にしないよう努めている。だがさすがに今日のは気になつて仕方がなかった。

だって、あり得ない。あんな数値はあり得ない。

意識を保っているだけでも信じられないのに、そんな状態で平然と立って生徒を怒鳴り付け、四十五分間も教壇に立ち続けるだなんて。

「どう考えてもおかしいだろ……。つっても確かめようはねえし。あーもう、なにが用事だよ帰ってんじゃねえよ伊佐のやつ！」

ぶつぶつ不満を声に出してみても悶々とするばかりで、口がへの字に歪んでいく。

髪に手を突っ込んで、ぼさぼさに乱れるのも構わず掻き回……。そうとした。が、ナオトはそ

こで手を止めた。同時に足が止まった。

伊佐の異常なことなど、一瞬、完全に頭から消し飛んだ。

それ以上に異常なものを、日没迫る街影の向こうに見てしまった。

それはものすごい勢いで走っていく人影だった。ふたりいた。ひとりには男だ。背を丸めたような不自然な格好をしていた。もうひとりには小柄な少女……だったと思う。

だがナオトの意識を瞬時に捕まえた異常は、人影の存在でも背格好でもない。例の数字だ。

走り去ったふたりのどちらの容姿もナオトははつきりと確認できなかった。だが数値の異常は一目で焼きついた。

少女の頭上に見えた数値は桁があまりにも多すぎた。通常の人間はどんな人であろうと五桁を超えることはない。だがあの少女の上には、少なくとも八桁の数字があった。

対してそれを追う猫背の男の頭上に見えた数は——『0』だった。

少女はともかく、男のほうは断じて見間違いなどではない。はつきり見た。

『0』。それは死した者を意味する。

走れるはずなど……動けるはずなど、ない。

「……俺、疲れてんのかな」

いくらなんでもありえない数値を見すぎだ。目がおかしいのかもしれない。今日はさつさと帰って、さつさと寝たほうがいいだろう。

そう思って帰路を急こうとし――。

「いや。いやいやいや、待て待て待て待て！」

慌ててその足を引き止めた。

気に留めるべきは数字ではない。状況だ。

今、ひとりの少女が不審な男に追われていたのではなかったか。

認識と同時にナオトは弾かれたように駆け出した、見かけたふたつの人影を追い、捜す。

どっちへ向かったのかを知るのには思いの外に簡単だった。

ナオトが駆け込んだ先は、まるで超局地的な災害が通り抜けたかのような有様だった。電柱はへし折れ、道路のアスファルトはめくれ上がり、ねじり切られたガードレールの一部が道路の真ん中に放り捨てられている。

なるほどな。妙な納得が胸に落ちる。異常数値を掲げたふたり組みらしい足跡だ。

無惨に刻みつけられた傷跡を、道行く人たちが目を丸くしながら携帯端末で映像記録に残している。あとできっと無数の映像がT・O・Iにアップロードされることだろう。

せわしなく左右に標的を探すカメラマンたちを横目に、ナオトは尋常ならざる被害が続く道を走り抜ける。

いつからだろう。心臓がいやに速く胸を打っていた。

緊張や恐怖ではない。ひどく切迫した気持ちがある。あの少女を心配しているのだろうか。

いや違う。なにかひどく、気がはやる。

(あの子は……)

さっきの少女は、似ていなかったか。

今朝、不意に見た白昼夢。無人の繁華街に現れてこちらを見つめていた、金髪の少女。冷ややかな、けれどなぜか泣き出しそうな、悲しく切ない真紅の瞳。見つけなければならぬ気がした。見失ってはならない気がして、すでに息もすっかり上がっているというのに足は先へ先へと急ぐ。

本能に、あるいは感覚に急かされるようにして走って、走って。時々転がる瓦礫を飛び越えさらに走って……ようやくナオトは目的の場所へとたどり着いた。

そこは薄暗い場所だった。無人団地。

ベッドタウンとして開発が進められていたが、数年前に起こったある事件により計画が中断され、そのまま放置された区域だ。

ほとんど完成した状態でありながら、電気を引かれることもなく廃墟と化した四角い建物がいくつも整然と並んでいた。あちこちでは明かりのない街灯がぼつんと一本足で立っており、細長い人影のようなシルエットを無人の街角に浮かび上がらせる。

ここに好き好んで近づく者はいない。アウトローを気取る物好きも、たむろ場を求める不良たちもここを拠り所には選ばない。

人のために造られながら人を受け入れることなく廃墟となった無人団地には、ねばついた圧

迫感のようなものがあるのだ。それは不気味さというより気色の悪さであり、恐怖というより不快感だ。

駆け込むつもりだったナオトの足も、無人団地の敷地の一歩手前で止まった。

「つ……ここかよ」

立ち入り禁止の看板を掲げたフェンスを見つめて、ナオトは苦々しく吐き捨てる。

さっきの男と少女がここへ入り込んだらうことは一見して察しがついた。貧弱なフェンスが大きくひしゃげて、立ち入り禁止の看板ごと不自然に内側にめくられてしまっていたからだ。

まるで車で無理矢理突っ込んだかのような有様だ。だがタイヤ痕などはなく、代わりになにか鋭いもので引つ掻いたような不可解な跡が地面をえぐっていた。

ここから先は危険だ。見るからにやばい雰囲気だ。漂っている。

影の色濃い無人団地の奥のほうから建物が崩壊したような音が聞こえて、ナオトは鋭く息を呑んだ。

目の前に待ち構えているのは、夕焼けの茜色と影の黒をはっきりと切り分けて纏った、寂れた光景ばかりだ。動く姿はない。さっきの轟音さえなければ、生き物の気配を探ろうとも思わなかっただろう。

だが続けてもう一度、今度はさっきよりもやや大きく崩壊の音が聞こえて、ナオトは反射的に地面を蹴った。ひしゃげたフェンスの隙間をくぐって人氣のない暗闇の領域へと踏み入る。

あの少女と男がここへ入ったのなら、今の音はそのどちらかが引き起こしたものだらう。ど

ちらにせよ少女の危機を知らせるものであるに違いなかった。

音が聞こえたのは真つ直ぐ奥の方角からだ。そつちへ向かって、ナオトは舗装された歩道を一直線に駆け抜ける。

辺りは時間が止まったかのようだった。今すぐにでも使えそうなほどしつかりと建物が並んでいるのに、一欠片として人の生活の温もりはない。あるのは空の団地と忘れられた樹木。吐き出されることなく留まった淀んだ空気と、張りついたような影。

数々の怪談が生まれるのも無理はない。視界の端を過ぎていく景色に、ナオトは思わず悪寒を覚えた。

こんな場所に、なぜあの少女はやってきたのか。

(追われてたんじゃないのか？ だったらこんなところじゃなくて、もつと人のいるほうに逃げたほうが安全だろ……)

なんなら警察に駆け込んだ方がいい。繁華街で悲鳴を上げれば大勢の注目が集まる。

もし少女の意思とは無関係にここまで追い込まれてしまったのだとしたら、これはもう一刻の猶予もない緊急事態だ。急いで見つけて、それこそ警察に連絡しなければ。

無人団地は建てられた直後にそのまま放置されただけあって同じような風景が延々と続き、すぐに迷路のように方向感覚を失わせた。

目印になるような個性などどの建物にもない。団地のくせに地図看板がひとつもないのはどういうことだ。

「くそ……どっち行つた……？」

真つ直ぐ進んでいた道が並ぶ枯れかけた木々に突きあたり、ナオトは慌てて足を止めた。

道は丁字路になっており、左右へ分かれて伸びている。素早く両方の道を確認するが、どちらからも物音は聞こえてこなかった。

辺りはしんと静まり返っている。嫌な気分だった。西日の色濃い燈色が無人団地をこの場に焼きつけようとするかのように入り込んでくる。刻みつけられた影は中に入ると暗闇に閉じ込められたような錯覚を抱かせた。

さつきまで方角の頼りにしていた崩落音はもう聞こえない。荒く乱れた自分の呼吸音がうるさいくらいに辺りは沈黙していた。

「……逃げた、のか？」

誰かに確かめようとするかのようにナオトはぼつりと声に出す。

考えてみれば、電柱をへし折りながら追いかけていたふたりだ。後からナオトが必死になって走ったところで追いつけるとは限らないし、ナオトが到着するより早く少女が逃げ切るという可能性は十分に考えられた。

(なにやってんだ……俺は)

無計画にもほどがある。そもそも、まず警察に連絡するべきだったんじゃないのか。

瞼の上から目に触れて、ナオトは深くため息を吐き出した。

あの少女はもう無人団地にはいないのかもしれない。行き先もわからないし、引き返したほ

うがいいだろうか。それとももう少し近くを捜してみようか。
迷いながら踵を返そうとしたときだ。

——キチチチ。

「っ……………!?!」

すぐ近くで聞こえた。弾かれたようにナオトは振り向く。丁字路の左側へと続く道。その先の濃い影の中に、男が立っていた。

(いつの間に……………!)

足音も気配もなかった。ナオトは咄嗟に身構える。反射的に頭上を確認した。『0』。間違いない、さっき見かけた男だ。

男は、くたびれ着崩れた深い紺色のスーツを身に着けていた。ストライプ柄のネクタイはすり切れてポロポロで、それが身なりを酷く粗末なものに見せている。本来ならそこそこの長身だろう痩せ型の体を、不自然なほど丸めて両腕をだらりと下げ、乱れ切った前髪の間からじつとナオトを観察している。

その目を見て、ナオトは息を止めた。全身がゆっくりと総毛立っていく。

男の目は人間のものではなかった。

眼球が握り拳ほどの大きさに肥大化し、眼窩から溢れて外側に飛び出している。やけに黒目の部分が大きく広がっていて、濡れた光沢が数メートル離れた距離でもよく見えた。

その黒目が、周囲を確認するためか不意に左右上下へ動いた。順々に見たのではない。右目

が右側を、左目が左側を、同時に向いたのだ。カメレオンがするようにんでバラバラに眼球を動かし、次いで右目だけがナオトを見据える。

「う……………っ」

思わず引き攣った声がナオトの口から漏れた。恐ろしい、と思うより前に気色悪いと感じた。なんだこいつは。どう見ても人間ではない。第一……頭の上の数字は『0』だ。すでに生きているとは言い難い。なのはどうして動き、こちらを見る。

「キチキチキチ」

奇怪な音がまた聞こえた。だが今度はどこから、なにかから聞こえてきたのかはつきりとわかつた。わかつてしまった。

目の前のこの男だ。だらしなく半開きになった口から涎を垂らしながら、その口内で甲虫が蠢くような音が鳴っている。

おぞましい光景だった。単純な嫌悪感からナオトの足が一步下がる。

その小さな動きに誘われたのだろうか。肥大化した左目までナオトに向き、男はくたびれたスーツ姿を引きずるようにしてこちらへ近づいてきた。

(やはい……………!)

逃げたほうがいい。恐怖を奥歯で噛み殺して、ナオトは身を引く。

そのすぐ脇を、声を通り抜けた。

「……………邪魔よ」

「え——？」

いや、抜けたのは風だった。黒くて、金色の——風。

風は少女の姿でナオトの前方へと駆け出すと、そのままの勢いで軽やかに地を蹴って宙へ跳んだ。

素早い跳躍はまさに突風のごとく。突風はナオトに向かって歩み寄るスーツ男を蹴り飛ばすと、後方にそびえ立っていた団地の壁へと叩きつけた。

軽々と飛んだ男の体は地震のような音を轟かせてコンクリートの壁を砕き突き破り、内側へと倒れ込む。

長い年月の緊張から解き放たれたように砂塵がもうと舞い上がり、分厚い灰色のカーテンを作った。

一瞬の出来事だった。そしてなにがなんだかわからない。

腰を抜かすことも忘れてただ啞然と立ち尽くしていたナオトを、突風のように飛び込んできたあの少女が振り返った。

夕焼けに茜色と影とが焼けつく無人の団地で、艶やかな金色が翻る。

美しい少女だった。輝かんばかりの金色の髪を高い位置でまとめて、その根本をぴんと立ち上がった黒いリボンで飾っている。肌は透けるように白く、差し込む茜色を受けて燃えるように色づいていた。

見つめる瞳は金色だ。髪色よりも豪華なそれは投げられた一瞥にさえ計り知れぬ高貴さを感じさせる。

思った通りよく似ている。今朝の白昼夢で一瞬だけ遭遇した、ふたつに結わえた金髪に真つ赤な瞳のウサギのような少女と。
ただし今ナオトが対峙しているひとつ結びに金色の瞳の彼女のほうが、いくつか歳が上に見える。おそらくナオトと同じ年くらいだろう。

ええ。おそらくナオトと同じ年くらいだろう。
薄い唇、細い肩。背はナオトよりだいぶ低く、軽く顎を引いているせいで大きな瞳が上目づかいにこちらを見ている。足元まで届く長い黒のマントを纏い、華奢な肢体は傷ひとつなく滑らかな白い肌を惜しげもなく晒し……。

晒し——。

「……はあ!？」

目にしたものがにわかに信じられなくて、ナオトは素つ頓狂な声を撥ね上げると顎を突き出してまじまじと少女を見た。

開いた口が塞がらない。二の句が告げない。

服が。華奢な体をすっぽりと包む黒マントの下に当然身に着けているはずの服が……なかった。白昼夢の少女が着ていたような黒いドレスどころか、ブラウス一枚、スカート一枚、いやそれどころか下着ひとつ……つけていない。

纏っているのは黒のマントだけだ。そんな姿を恥じることもなく少女は隠すもののない腰に手をあてて、ふん、と小さく鼻を鳴らした。

「なにを間抜け顔でじろじろと見ているのかしら。貴方……変態？」
 わずかに幼さの残った甘い声だ。けれど口調は幼さとは遠く、明らかにこちらを見下している響きがある。

お前に言われたくねえよ露出狂か。そう返そうとして、ナオトは言葉を喉に詰まらせた。ナオトの目が少女の頭上に浮かぶ数字を見た。少女の格好も信じたいが、それ以上に並んだ数字に驚愕する。

さつき一瞬見かけた『異常』は、確かに現実だったらしい。

「は……八千万!？」

とんでもない数字だ。何度数えても八桁ある。頭上に見える数字でここまで桁があるとは思いませんでした。

ただし彼女は明らかにイレギュラーだ。それは今こうして目に見えている数値からも、ついさつき男をひとり蹴り飛ばした尋常でない力からも明白だった。

「……なに？ 意味がわからないのだけれど」

信じたいと目を見開き、まじまじと頭の上を見つめ続けるナオトに、少女は怪訝そうに形の良い眉を寄せた。

当然の反応だ。眼前に視線を合わせてしかるべき誰かがいるというのに、そしてその人物のほうを向いているというのに、目はなぜかなにもない場所を注視しているのだから。

引き寄せられるように視線を少女の瞳に戻して、ナオトは誤魔化そうと言葉を探した。頭の

上の数字のことなんて、いかに異常な少女とはいえ受け入れてもらえとは思っていない。

「いや、あの……胸、ないなと思って」

驚愕に固まった頭ではちよいどいい言い訳が思いつかず、ナオトの口はするりと本音を吐き出していた。

自然とナオトの視線は少し落ちる。透けるような白い肌。そこに女性らしいラインを描く柔らかな膨らみは……ちよつと、見て取れない。

一瞬、短く息を吸い込む音が聞こえた気がした。それがなんのためか理解するより圧倒的に早く、ナオトの顔面に少女が拳を突き入れた。

「うぶっ！」

潰れた声漏れる。眉間を殴られた。しかもグーで。

反論にしては強烈過ぎるパンチによるめき、ナオトは両手で顔を覆った。視界がチカつく。服を着ていないくせに胸の大きさは気にするのか。全力でツッコみたかったが、さつきのスーツ姿の男のように後方の団地まで吹っ飛ばされてはかなわないので、やめておく。

少女は殴ったことなどすっかりどうでもいい様子で、造り物のような顔を人形のような無表情に戻してナオトを見やる。

「こんなところをうろついていると邪魔だわ。さつきと立ち去りなさい」

「立ち去って、ためえ何様だ……」

「ああ、だけど」

不満を込めて言い返そうとしたナオトの言葉を遮って、少女は首を巡らせた。金色の瞳を向けた先には、さつき崩れたばかりの団地の壁の山がある。見据える瞳が鋭く細められる。「もう遅いわね」

こともなげな少女の言葉尻に重なって、ガリガリと硬いものを噛み砕くような音が聞こえた。重なったコンクリートを押し上げて、さつきのスーツ姿の男が出てくる。

その姿にナオトは絶句する。

男の顔が、人間ではない姿に変貌していた。

一言で諭えるなら虫だろう。肥大して飛び出していた眼球は窮屈な眼窩から解放され、顔面に盛り上がるような赤黒い目玉に変わっていた。鼻はなくなり、代わりに蟻のような噛み砕くための顎を備えた口が顔の下半分を占めている。

威嚇するように顎が大きく開かれると、その内側で無数の牙が手招きするように蠢いた。

「嘘、だろ……なんなんだよ、これ！」

悪夢でも見ているのではないかと思った。同じ白昼夢なら、誰もいなくなつた繁華街で見知らぬ少女と見つめ合うような発展のない夢のほうがいい。

たじろぐナオトの前で、マントを一枚羽織つただけの金髪の少女が化け物男に向き直り静かに身構える。

「見ての通り、化け物よ」

「なに冷静なこと言ってるんだ！ やばいだろこれ、逃げたほうが……？」

ナオトの忠告は唐突に腰を引かれて途切れた。

次の瞬間、ナオトの目の前をなかが凄まじい速度と風圧で掠める。直後にナオトの背後にあった団地の壁が爆発でも起こしたかのように弾けて砕けた。轟音が撒き散らされ、爆風が砂塵と一緒にナオトの横つ面に吹き付ける。

「い、え……は？」

今、なにが起こった。

爆散した団地をちらと横目で確認し、それから予感に促されて反対側へと首を向ける。

一階部分があぐれた団地を背にスーツ姿の蟲男が立っている。その腕が元々の二倍以上に引き伸びて、関節をことごとくあらぬ方向へと曲げていた。

妙に硬い動きの腕が、貧弱なほど細長いそれに反していとも軽々と持ち上げたのは、背後で積み上がった崩れたばかりの団地の壁だ。赤黒い目がちらを見据えると、顎を動かしてキチキチと嫌な音をたてながらコンクリートの塊を投げつけてきた。

「うお、お、冗談じゃねえぞ！」

悪態をつくナオトの腕を少女が引いた。半強制的にしゃがまされたナオトの頭上を投げつけられた平たい瓦礫が飛んでいて、また背後の団地の壁を崩壊させる。

瓦礫の重さに加え、それをあれだけの速度と威力で投げ飛ばす腕力は尋常ではない。もしも少女が腕を引いてくれなかったら、今ごろナオトの首が胴体から切り離されて、あの瓦礫の中で潰れていたかもしれなかった。

「まったく、貴方のせいであいつに余計な武器を与えてしまったわ」
低くしていた身を起こして、少女は長い金髪を翻す。

「え、俺のせい!？」

少女の言う武器とはつまり、あそこで山積みになっている瓦礫のことだろう。だとしたらあれを生み出したのは少女のはずだ。

だが今はそんな不平不満より、もっと優先するべき事項があった。

「あー、その。ごめんなさい。なにも見なかったことにして素直に家に帰ってすぐさま寝るから、今回はこのへんで勘弁してもらえませんか……」

か、とは音にならなかった。

突然振り向いた少女がナオトの胸部に蹴りを放ち、その衝撃によつて吹っ飛ばされたからだ。

肺の中で空気が潰れる音を聞きながら、ナオトは後方の地面にしたたかに体を打ち付けた。幸運なのかまさか少女がコントロールしたのか、思いがけず軽々と運ばれたナオトの体は鋪装された道をわずかに逸れて土の上に落下する。

転がった際に少し土が口に入ったが、それがどれほど優しいダメージだったのかを、ナオトは顔を上げてすぐに知ることになる。

ついさっきまでナオトが立っていた場所に、尖った瓦礫が突き刺さっていた。まるで公園に意味もわからず立っているオブジェかなにかのようだ。ただしそれは人を和ませたり、芸術的感性を刺激したりするためのものではなく、荒々しく粗暴な方法で人を殺そうとして生まれた

ものだが。

脂汗がこめかみに滲む。安易に踏み込んだ自分の軽率を恨んだ。やばい。これはやばすぎる。理屈も事情もとんと見当がつかないが、関わってはいけなかった。

再び鈍い音がして目をやると、飛んできた瓦礫を自分とは比べものにならない華麗さで跳躍し、かわしている少女の姿が見えた。ちらりと一瞬、少女がこちらを見た……気がする。

(これは……)

自分がおとりになるから今のうちに逃げる。……と、言いたいのかもしれない。いや、きつとそう言いたいのに違う。

完全なる自己解釈のもと、ナオトは衝撃に痛む体を引きずり起こした。

さっきの蹴りも、絶対にもっとマシな方法があったと思うが、彼女にしてみれば咄嗟に身を挺して庇ってくれたというやつだったのだろう。なんて心優しい少女だ。全身ものすごく痛いけど。

ここは少女の意思を尊重して逃げるべきだ。きつと彼女もそれを望んでいる……はずだ。

「よ、よし、すぐに助けを呼んでくるから……!？」

立ち上がり、身を翻して駆け出そうとした。が、振り向きかけたナオトはまた硬直する。

重い風圧が再度ナオトの真横を切り裂いていった。なにが飛んできたのか、確認するまでもない。

すく先、ほんの二メートルほど先にあった街灯をぼつきりと中ほどで折って、白く塗られた

コンクリートの壁が地面にめり込んでいた。

今度は引き寄せてくれる腕も蹴り飛ばしてくる足もなかった。もしあと数秒早くにナオトが駆け出していたら、あれが直撃していたことだろう。

「あ、あれ……？」

ナオトは後ろを振り向く。今のうちに逃げてくれはどうした。勝手な自己解釈だと自覚していたにもかかわらず、一瞬本気でそう思った。

少女はまだそこにいた。ただしナオトを庇おうというよりは、昆虫男の隙を窺っているように見える。

「貴方のことまで構ってられないから。自分の面倒は自分でみなさい」

顔面昆虫男がまた口元をキチキチ言わせながら、細長い腕を後方へ振った。関節の向きを無視して、背後に積まれた瓦礫をひとつ抱え込む。

「ち、ちよつと待て、まさかとは思うが……」

嫌な予想がごく自然なように降ってきた。

昆虫男の赤黒い目がナオトを見つめている。異様に長い腕が白い瓦礫を抱えたまま高く振り上げられる。躊躇いなどない。力強く振り下ろすと、瓦礫が唸り声をあげて飛んでくる。

「うわあああつ！」

情けなく悲鳴を上げながらナオトは必死の思いで横に跳んだ。体を地面に投げ出して低く伏せる。

直後にすぐ近くで爆発音のような音が炸裂した。さすがにもうなんの音かすぐにわかる。そこに建っていた団地の壁が崩れて大穴を空けた音だ。

第六感めいたものがナオトに焦って顔を上げさせる。捜したのは少女の姿だ。すぐに見つけた。長い金髪を躍らせて、少女は風のように疾走する。ナオトへでも昆虫男へでもなく、最初に昆虫男を叩きつけた建物の裏手に向かって。

理屈はわかる。意味もわかる。あの怪物の背後に回ろうとしているのだ。

だが、ということばかり。

「やつぱり俺がおとりかあああつ！」

ほんの十数秒前には一目散に逃げ出そうとしていた自分を柵に上げてナオトは声の限りに叫んだ。

昆虫男はまた瓦礫をぶん投げる。ナオトに向けて。

ありがたいことに今度の瓦礫は脆かったようで、投げつけられたのと同時に崩れ、大した質量は飛んでこなかった。それでも当たればただではすむまい。ナオトは地面を転げて逃げ回る。

「いつてえ……」

硬い歩道に手をつけて起き上がる。

その瞬間に、鋭く息を吸い込む悲鳴のような音を聞いた。

反射的に振り返る。昆虫男の腕がさらに伸びて鞭のようにしなり、後ろへ回り込もうとしていた少女の足を捕えていた。

そうだった、とナオトは舌打ちする。奴の目はまだ蟲の顔に変化してないうちから、左右バラバラに見回すことができた。ナオトのほうを見ていてなお、真横を左目だけで確認することもできるといふわけだ。

男の腕が強く引かれ、振り上げられる。少女の体は跳ね上がり、男は腕を一息に振り下ろす。「やめろお！」

「くっ……！」

ナオトの叫び声と少女の呻きと、それらを掻き消すように強く風が通り抜ける。

直後、少女の小さな体は鈍い音をたてて地面へと叩きつけられた。ただし伸び放題に伸びた芝生の上だ。少し逸れていたらコンクリートの壁に激突していただろう。

それでも軽く弾み上がるほどの力で叩きつけられたのだ。少女は機敏には動けず、けれど気を失うわけにはいかないとばかりに身を起す。

獲物を捕まえた気分なのだろうか。昆虫男はあつさりとナオトから顔を背け、まだ立ち上がれない少女へと向き直る。男が勢いよく腕を引くと少女の体はあまりにも軽々と地面を滑り、枯れかけた街路樹に激突した。

「うあつ……！」

鈍い衝撃音と、苦痛を孕んだ少女の小さな悲鳴。

その瞬間に、ナオトは駆け出した。勢いよく方向転換すると、少女へ背を向けて走り出す。

(今しかない……今しかない！)

この数秒、昆虫男の意識は完全に少女へと向けられていた。そもそもナオトはここへ割り込んできてしまったイレギュラーなわけで、元々あの男の標的は少女だった。

ナオト程度のものが一匹どこかへ姿をくらまそうと、どうでもいいはず。

走って茂みを飛び越え、さつき崩れて大穴があいた団地の一棟に滑り込んだ。

日の光を遮る分厚い壁と天井に囲まれた中は、陰鬱と暗い。色濃い影はすぐにナオトの姿を隠した。真っ直ぐに走り去るナオトの足音も、やがて影の向こうに消えた。

……それを、少女は横目に見ていた。

ナオトの姿が建物の中につきかり隠れてしまうと、地面に這いつくばったままの姿勢で少女は薄く笑みを浮かべた。それはどこか自嘲的であり、同時に安堵したような表情でもあった。

少し前に、人間は弱く臆病だと少女に語って聞かせた人物がいた。今、少女はその言葉を思い出し、そして深く理解していた。

細い足首を掴む手にきつく力が込められる。あの忌まわしい化け物の手だった。すでに人間としての形を失いつつあるというのに手先には未だ五本の指を備えており、それががちりと少女を捕えて放さない。

伸びきった腕は再び少女の体を宙へと運んだ。跳ね上がるようにして小さな体は浮き上がり、

空を切る。

少女はしつこい腕から逃れようと身をよじった。だが足首に食い込んだ指は離れない。先ほどよりもずっと高く大きく腕を振り上げて、男は今度こそと狙いを定める。異形の目が見据える先は、最初に自分の体を埋め込んだ崩れかけの建物の壁だ。顎を鳴らし、全身をしならせるようにして獲物を捕縛したまま腕を一息に振り下ろす。

そこへ……。

「うおおおおおおつ!!」

瓦礫の陰から飛び出して、ナオトが重く硬いものを昆虫男の後頭部に力一杯叩きつけた。鈍く金属質な音が鳴り響く。

反動を使ってもう一撃。今度は頭部を真横から捉え、なにかが砕けるような嫌な感触がナオトの手に伝わった。

異形に変わった頭部を若干歪ませて、昆虫男は大きく体を傾けるとゆっくり倒れる。

倒れた体に引つ張られて、少女の足首を捕まえていた指がほどけて離れた。

宙に放り出された状態で解放された少女の体は地面へと向けて落下していく。長いマントが風を受けてうるさくはためく。

それを追いかけて、ナオトはいっぱいに腕を伸ばした。

目が合った。金色の目と。

そして一部壁が砕けた建物の前でナオトが踏ん張るのと同時に、伸ばした腕の中に少女の体

が落ちてくる。

「つ……と、とと……」

覚悟していたほどの重さがなくて、ナオトは怪訝に思いながらも受け止めたものに急ぎ目をやった。

手触りでわかる上等な質感のマントの向こうに、ほっそりとした肢体の柔らかさを感じる。

肩も腕も足も、どこにもおかしな感触はなかった。頬とマントに土汚れが少しあるだけで、流血どころか小さな擦り傷さえない。

「無事、みたいだな?」

確認のつもりでナオトは抱えた少女に問うた。

無事ですむはずがない。傷があつてしかるべきだとも思ったが、そんな疑問はとりあえず後回しだった。大体、人間の顔が虫のようになりつつ小々な少女が男ひとりをコンクリートの壁が砕けるほどの力で蹴り飛ばしたりするほうが、よほど非現実的だ。

少女はしばらく黙ったまま動かなかった。気を失っているわけではない。宙に投げ飛ばされたときからずっと、彼女の大きい宝石のような瞳はナオトを見つめたままである。

「おい? 大丈夫か?」

あまりにも黙っているから心配になって、ナオトはもう一度問う。

するとようやく、乱れた前髪の間からひとつ瞬きをしてから少女は薄い唇を動かした。

「……何故?」

返ってきたのは囁くような問いだった。
ナオトは一拍間を開けてから眉根を寄せる。

「なにが？」

「戻ってきたわ。逃げたと思ったのに」

「あのなあ……」

そういうことか。ナオトはがつくりと肩を落とす。

それには構わず少女は視線を横へと滑らせた。見たのは歩道の隅に投げ出された赤い物体だ。ナオトが抱えて走ってきて、それで昆虫男の頭を力任せに殴りつけた。

放置された団地の中で使われることもなく眠っていた、消火器だった。

「いくらなんでも女ひとり置いて逃げられねえだろうが。一応、命の恩人だしな」

消火器を不思議そうに見つめている少女へ、ナオトは呆れを込めて答える。

金色の視線が戻ってきた。ぱちりとまた臉が上下する。人形のような目だとナオトは思った。大きく色鮮やかなのに、温かみや感情がどこか遠い。

「おかしなことを言うのね。私は貴方に恩義を感じてもらわなければならないことなんて、していないわ」

瞳と同様、やや感情が薄く淡泊な口調で少女は言う。

どこか突き放すようにも聞こえた。ナオトはわずかにむっと不満を覚える。

「お前こそおかしなこと言うなよ。気付かないとも思ってるのか？ 最初もそうだし、その

後もそうだし」

少女が飛び込んできたときの強烈な蹴りは、ナオトを攻撃しようとした男の動きを完全に止めてくれた。その後の瓦礫による投擲攻撃でも腕を引き、最終的には蹴り飛ばしてまで直撃から守ってくれた。

少女が側から離れた後の瓦礫も、ナオトの反射神経で避けられるものではなかった。なのに一発も直撃しなかったのは、瓦礫の軌道がなにかによって逸らされていたからだ。

どうやったらそんなことができるのかナオトにはわからなかったが、そんな超常的な現象で助けてくれたのはこの少女以外にいない。

ナオトの指摘を無視するように、少女はまたそっぽを向いた。

照れているのだろうか。だとしたら、少女らしいところもあるのではないかと感心もする。もともと、少女らしさを発揮するならまず己の衣服状況について認識を改めてほしいところだが。

少女の視線を辿って顔を上げて、ナオトはまた眉を寄せた。今度は怪訝さではなく、不快さのために。

積み上がった瓦礫の側に、倒れ伏した男の姿があった。転がった頭の上で値段のように浮かんでいる数字は、やはり『0』だ。

ようやくその事実を思い出したかのように男の体にノイズが走る。調子の悪いテレビのような横線が幾本も横切って、切れる直前の電灯のように体全体が数度瞬いた。

そして変貌が始まる。白い紙が墨に浸され染まるように、男の体が端から徐々に黒くなっていく。砂を集めるような音が微かに聞こえていた。やがて数秒の内に男の体はただの黒い塊と変わり果てる。完全な死がそこにあった。

もはやこれは誰でもない。人間だとか、どこの誰で苗字がなんで名前がなんで。どこで生まれてどんな家庭に育って。そういった情報の欠片さえ持たない。ただの黒い物体。

これがナオトの知る、数字が『0』になった人間の姿だった。

こんな姿で見えているのはナオトだけだ。この眼窩にはまった眼球が。その奥で煌めく水晶体が。『狩人の眼』が、ナオトに死体を黒一色の物体に見せる。

そしてこの光景は、この胸糞悪い光景は……一本の糸を手繰り寄せるようにナオトの頭の奥の奥から、忘れられない記憶を引きずり出した。

4

遠くて近いその記憶は、いつも恐怖を伴った。

そのときナオトはひとり、呆然と立ち尽くしていた。

足元は濡れていたと思う。吐き気のするような臭いが辺りに充満していた。そのせいかあのとき一体何時ごろで、明るかったのか暗かったのか、そんなことさえろくに思い出せない。はつきりと覚えているのは全身を貫くような恐怖だ。恐ろしかった。とても怖かった。

泣くことも震えることも叫ぶこともなにもかも忘れて、辛うじて心臓と肺だけは動かして、そんな状態でただただ見つめていたものは……すぐ近くで横たわっている黒い塊だった。

それは人の形をしていた。いや、人らしき形をしていた。

おそらくあそこが頭だ。他の場所より突き出っていて少し丸いから。だとすると反対側が足で。全体から少し浮き上がったように添えてある部分が、腕なのだろう。

それはさつきまで、ナオトの母親の姿をしていた。

臭いが。くらくらしした。鉄の臭いだ。錆びた鉄の臭いが、胸をむかつかせる。違うこれは。

血の臭い。

転がった黒い塊のすぐ横には、濡れてなお鈍い光沢に包まれたものがある。べったりと濡れ、それでもなお鋭さを隠しめせずに晒すそれは……怪しく光る、それは――。

「……いつになったら私は貴方から解放してもらえるのかしら。そろそろ下ろしてくれない？」

変態さん」

冷めた、というより辟易した声に、ナオトの意識は現実へと引き戻された。

「あ、ああ、悪い」

責めるような半眼に、慌ててナオトは少女の体をなるべく丁寧に地面へと下ろした。そこではたとえ気づく。

「って誰が変態だ！」

「貴方よ。他に誰かいて？」

「いねえよ！ そういう問題じゃなくて、俺は変態じゃねえって言ってるんだ！ あとお前にだけは変態呼ばわりさせねえからな！」

この全裸マント女、と付け足そうと思ったが、それだけはさすがに胸の内に留めた。

いくら相手が度を越えた変態で理解を超えたファッションセンスの持ち主であっても、一応命の恩人であり初対面の女子だ。すでに手遅れな気もするが、それなりの態度では臨みたい。

そんなナオトの些細な気遣いなどどうでもいいとばかりに、少女は己の体を平気で晒すように腰に手をあてた。

気が付けば日はすっかり沈んでいた。背の高い建物が整然と並ぶ無人団地では、残光の幻想的な色彩を刷いた西空は残念ながらあまり広く拝めない。

ずっと向こうでは街並みに明かりが灯っている。もうそんな時間だ。今はまだ薄暗く辺りを窺えるけれど、すぐに夜の帳が降りるだろう。そうなれば電灯のない団地は暗い影に沈んでしま

まう。

冷えてきた空気に寒そうな素振りも見せず、少女は冷たい歩道へ素足を踏み出す。向かったのは転がるあれの前だ。少し前までは怪物で、もう少し前まではまだ人だった黒ずんだ塊を見下ろして足を止める。

「死んでいるわね」

「……ああ。そうみたいだな」

あまりまじまじとは見たくない。ナオトは素っ気なく答えて、視線を少女の足元ではなく揺れる彼女の金色の髪へと移した。

その髪がシルクのリボンのように揺れる。少女が肩越しに振り向いたのだ。

「あら。冷静なのね。人をひとり殺したっていうのに」

やはり感情は平坦だったけれど、その声色には意外そうな軽い驚きの感情があった。こんなことを意外だと思っなんて、それこそ意外だった。ナオトは渋いものでも飲み込んだように口元を歪めた。

「冗談だろ、これでもかなり動揺してんだ」

「ふうん。そう」

言っていて、自分でも白々しい言いぐさだったと思った。少女もそう思ったのか、返ってきた一言は納得も疑問も含まない単純なる相槌でしかなかった。

こちらを見つめる少女から逃げるように視線を彷徨わせて、ナオトは頭に手をやる。仕方な

いじゃないかと、別になにを言われたわけでもないのに心の中で言い訳した。
 (そりゃ動揺はするだろ。こんなもん見て、平静でいられるわけない)

横目で盗み見るように、ナオトはあれへ目を向けた。

無造作に転がった黒いもの。どれほど人だったときの姿を見ていても、この状態を見てしまつたらもう『人間』だなどとはとても思えない。こうなつてしまつたらもう『物』だ。
 そう感じる自分は無情だろうか。

「まあ、さっきの姿を見れば人間だと思つうのも無理があるかしら」

「え？」

心の中を見透かしたように告げられた言葉にどきりとしつつ、ナオトは顔を上げた。一瞬、意味がわからなかった。まさかこの少女も死体が黒ずんだ塊に見えているのだろうか。

だがすぐに察する。そういえばさっきの男は死して姿を失う前から、人としての顔を失っていた。そのことだろう。

少女は長い金髪の手先に白い指を絡めて、梳くように放す。

「どの道、彼は侵食が進みすぎていて助からなかったわ。遅かれ早かれこうなつていた」

(それは……フォロー、なのか?)

独白なのかそうでないのか、少女の淡々とした語調からは判断できない。彼女の心情を察するには、ナオトは少女のことを知らなすぎた。

「それで？」

歩み寄つてきて目の前で止まり、どこか尊大に顎を持ち上げて少女は詰問するようにナオトを見上げた。
 目尻のつり上がった大きな瞳だ。すぐ近くで瞬くその色に、ナオトは思わずたじろぐ。

綺麗な目だった。金色の虹彩は非現実から覗き込まれているかのような幻想的な色をしていて、見つめられるとそのまま魂を吸い取られてしまいそうだ。

「聞かせてもらえるかしら。貴方、何者？」

「何者って……ただの通りすがりの高校生だけだ」

少女はいささか苛立ったように瞳を強く輝かせる。

「この街のただの高校生は、こんな辺鄙な場所を偶然通りすぎるものなのね」

「それは……」

ナオトは言葉を濁して口をつぐむ。

見かけた少女の頭上に異様な生命力の数字が見えたから。などと素直に白状する気にはなれなかった。これだけの異常事態の中に身を置く少女だ。彼女ならナオトの話をすんなり受け入れてくれるだろう。だがだとしたらなおのこと、ややこしいことになりそうで嫌だ。

「そんなことより、あいつはなんだつたんだよ。途中からあいつ、完全に顔が人じゃなくなつたぞ。なんか知つてんだろ？」

軽い咳払いを強引に捻じ込んで、ナオトは自分の話題に拘り替えた。

そのことにさして気分を害した様子もなく、少女は新しい話題へ「ああ」と相槌を打つ。そ

の先に答えを続けようとした吐息を遮るように、不穏な音が紛れ込んだ。

「っ——!？」

その音に少女が唇を結び、ナオトが息を呑む。

聞こえた音は覚えのあるものだった。

——キチキチ。

甲虫が這いずり蠢くような気色の悪い音が微かに聞こえる。音はせわしなくもがいて、メリとなにかを力ずくで引き剥がすような別の音をたてていた。

それがなんなのかを先に目にし、理解したのはナオトだった。

「うげえっ……」

嫌悪感が声に出る。

死んで動かなくなった黒ずんだ物体。その頭部に鋭い爪を突き立てて引き裂いて、人間の頭部サイズの虫のようなものが蠢いていた。

中から……死体の頭から、成虫がサナギを破って出てくるように虫が這い出てきているのだ。それはくすんだ青色をしており、幾つもの節を持った平たい胴部に無数の細長い足がついた不気味な姿をしていた。盛り上がった赤黒い眼球が頭部でぎよろついている。

虫というより、もはや『蟲』だ。それが人だったものを食い破って外に出て、大きくせり出した顎を牙剥くように広げ——。

「どけ！」

咄嗟に体が動いた。ナオトはほとんど反射的に少女の腕を強く引いた。代わりに自分が前に出る。反動で浮いた腕を盾にするように眼前に掲げた。

次の瞬間だ。不可視の力にひどく荒く引つ張られたように、盾にした右腕が後方へ跳ね上がった。

同時に突き飛ばされるような衝撃が肩口にかかる。

けれどどちらの感覚も一秒と持たない。すぐにあらゆる干渉から解放されて……ナオトは右側から重みを失った。

「……え？」

なにが、起こったのか。

わからないのか、わかりたくなかったのか。

バランスを崩して一歩下がったナオトは、誰かに捻じ曲げられるようにして首を動かした。自分の右肩を見た。

ない。あつたはずの、あるべきものが。

右腕が……。

「あ、ああ、あぐ……う、あ、ああ……!」

ナオトの全身が異様に大きく震え出した。

凍りついていたものが緩やかに溶け出すように、先を失った腕の断面からぬるついた液体が滑り出ていく。徐々に液体は太く激しく溢れて落ちて、あつという間に赤黒い滲みをナオトの

足元に広げた。

「迂闊だったわ。体の中ですでに羽化していたのね……」

ナオトの一步後ろで囁き、少女は白い頬に飛んだ赤い飛沫を指先で掬って口に運んだ。覗いた舌が指を濡らす赤いものを舐め取って飲み込む。その味わいに少女の唇が妖艶に微笑んだが、その恍惚とした表情も、彼女の言葉の意味も、ナオトには届いていなかった。

怖いだとか痛いだとか、そういう感情もとうに思考の向こう側へとぶっ飛んでしまっていた。ただ体が勝手に動いて、重みを亡くした右肩を逆の手で強く掴む。

小指の先が濡れた肉に触れた。その微かな感触に吐き気が込み上げる。

傷口は軽く潰れていた。食い千切られたのだ。あの胸糞悪い蟲の強靭な顎に。

キチチ。

嫌悪感がナオトに視線を持ち上げさせる。

蟲は再びナオトの正面へと戻ってきていた。頭部の割れた黒い体にあの細い足で降り立って、大きな顎を見せつけるように打ち鳴らす。その顎は血で濡れていた。

もう一度とばかりに蟲が顎を開き、青みがかった硬い皮膚の下で柔らかい肉がぶりんと震えて胴体を波打たせる。その動きに呼応するように、蟲の背で透明な羽が広げられた。

さっきはよく見えていなかったが、あの羽で飛んできたのだろう。そしてナオトの腕を食い千切っていた。

視界の端、離れたところに、見覚えのある制服を纏ったままの腕が転がっていた。投げ捨て



られたそれはあまりにも現実離れしていて、出来の悪い造り物にしか思えなかった。

「ぐ、う……あ、あ……」
 食い縛った菌列の奥から苦悶の呻きを漏らしながら、ナオトは蟲を見た。

背後で声が聞こえた気がした。たぶん後ろにいるはずの少女の声だろう。だが聞こえない。聞き取れない。

意味などない。ここに意味など、ない。

「あ……はあつ、はつ……あ、う……うあああ」

荒い呼吸を押しつけて、衝動のようなものが込み上げてくる。

まるで食い破られた肩から血液が逆流して来たかのように、目の前が真っ赤に染まった。

赤く赤く侵食される視界の中で蟲が飛ぶのがわかった。それと同時に、ナオトの中で赤が弾ける。

「あああああああああつ!!」

喉が吠え、足が駆けた。

冷えた風を切って突き進むと、赤い視界の海で蟲が羽を広げて迎え撃とうと飛び上がる。

その羽を、羽ばたく直前にナオトの左手が掴んだ。

ひとまともに握り込み、着地場所であった男の死体から蟲の体を引きずり下ろす。勢いのままに振り上げて、力任せに地面に叩きつけた。

なにかが潰れたような音がした。蟲の羽は千切れてナオトの手の中に残る。それを放り捨て

たナオトは——そこで、記憶が途切れた。

5

持ち上げた臉はひどく、ひどく重かった。

何故目を開いたのか、自分でもよくわからなかった。なにかを思つてのことだったような気もするし、そんな理知的なことではなくて、酸素を取り込むために口を開くような自然の反射によるものだったのかもしれない。

ただナオトはぼかりと浮上した意識に引き上げられるままに目を開けて、そこに広がる濃紺の夜空をぼんやりと瞳に映した。

(夜……だ)

遠くに月が見えた。白くて円い月はまるで鏡のようにナオトを見下ろす。

起き上がろうと思った。だが体が動かない。力がまるで入らないのだ。

臉を持ち上げられたのが不思議なくらい、指先ひとつを動かすのにもどうしたらいいのかわからない。感覚も意識もぼんやりとしていて、体はひどく冷たく、そして重たい。

(ああ、そうか……)

こんなにも体が重い理由をようやくナオトは理解した。体の上に瓦礫がれきがいくつも載っている。押さえつけるように覆いかぶさる冷たい瓦礫がれきがとても重くて、息ができない。

「つ、ぐ……」

呼吸を取り戻そうと身じろぐが肺がうまく動かない。息を吸い込むどころかぬるりとした液体がせり上がってきて、堪える間もなくナオトの口から溢れて零れる。

唇と顎を濡らし滴したたるそれは、血だった。なにか他の体液と混ざった、粘ねついて生ぬるい血。吐き気を誘う臭いがある。

すうと音をたてて血の気が引くように、もつと体の芯しんのほう冷えていく。ゆつくりと、ゆつくりと。底のない沼ぬまに沈しずんでいくように、ナオトは自分がなくなっていく感覚を味わっていた。

（そうか。これが……そうなのか）

これが死ぬということなのか。

まるで他人事ひとことのようなほんやりとした思いで、胸中で呟つぶやく。

（こうやって終わるのか……）

あの月が鏡かがみだったら、自分の頭上で刻々と数字を減らしていく様が見えただろうか。今はどれくらい数値が残っているのだろうか。今日の伊佐の数字よりも低いだろうか。

あとどれくらいで『0』になるのだろうか。自分では自分の死に様を見

られないから、確認たしかめしようがない。

月明かりを宿していた視界は、徐々に暗く光を失っていく。

数字の減る音が聞こえるようだ。

そんな中でナオトは、今ごろ夕飯の支度しとをしているだろう幼馴染せななじの顔を思い浮かべる。

（ああ……まいったな。服、こんなに汚したら怒るだろうなあ）

そもそも家に帰れるかなどわからないのに。いや、帰れるはずがない状況じょうきょうだというのに、ナオトはハルカに見つかからずに新しい制服を調達する方法や、彼女の心労しんろうをなるべく軽くする言い訳ばかり考えていた。

そんなナオトへ現実を告げるように、冷えた風が吹いた。

その一瞬いつしんでナオトの視界は再び光を取り戻す。束の間たつかげの光と自覚しながらも、ナオトは新たに視界に現れた光に目を細めた。

輝くような金色。あの少女の髪かみと瞳の色だ。

相変わらずなにも身に着けていないほっそりとした裸はだか体になぜか黒いマントだけを羽織った格好で、ナオトの顔にかかる月光を遮るように立ちほだかっている。

（無事だったのか……）

どうやら怪我けがもないらしい。頭上の数字も最後に見た記憶のものから下がっておらず、嘘うそのような高数値を保っている。少し分けてほしいくらいだ。

ナオトの胸にほっと安堵あんどが降りてくる。どういいういきさつでこうなったのか思い出せないが、

ナオトがこうして瓦礫に埋もれた後、あの蟲が彼女を襲撃して深手を負わせるなどということは起こらなかったらしい。

だが安堵を告げる言葉は声にならなかった。息も満足にできていないのだ。「貴方に心配してもらう必要はないわ。というより、氣遣われるべきは圧倒的に貴方のようだけれど?」

冷静な少女の言葉にナオトは笑いたい気持ちになった。

右腕を食い千切られ、瓦礫に埋もれて身動きもできずに、もうすぐ死のうとしている。まったく確かに少女の言う通りだった。

疑問なのは、どうしてナオトが彼女の身を案じたことが伝わっているのかということだった。疑問にせずとも伝わるのなら、ありがたい。どんな技術だとも思いつつも、唯一状況を知るであろう彼女に聞きたいことがあった。

(さっきの、あの蟲はどうしたんだ?)

疑問を込めて、辛うじて動く眼球を左右に動かす。ここからでは周囲がどうなっているのかよく見えない。もつとも、よく見えないのは体勢や場所の問題だけではないだろうが。

「あいつなら逃げたわ。貴方をそこに埋めた後でね」

なるほど。ナオトが瓦礫に埋もれている原因はあの蟲らしい。

納得し、絞り出すように息を吐き出したナオトを尊大な立ち姿で見下ろして、少女は少しの間を置いてから囁くように問うた。

「何故庇ったの?」

すぐに、男の頭部から虫が飛び出してきたときのことだとわかった。ナオトは震えるように眉根を寄せた。言葉の代わりに首を横に振る。

振る、というより小さな身じろぎでしかなかったが、それでも少女には伝わったようだ。

理由などわからない。理由があったのかどうかもわからない。ただ危ないと思っただけなら咄嗟に体が動いただけだ。

その結果の代償は、想像だにしなかったほどに甚大なものだったが。

「……そう」

ぼつりと少女の眩きが降ってくる。

その表情は月のような無表情で、こちらを見つめる眼差しからは彼女がなにを考えているのかまるでわからない。ただ辛うじて、すとんと落ちた肩と持ち上げられた眉から、呆れているらしいということだけは窺えた。

なにもそんな考えなしの犬でも見るような目を向けなくてもいいのに。呆れの背後にある蔑みに、ナオトはできるかぎりの不満を込めて少女を見返した。

見上げた金色の瞳が、不意に細められる。思案するように……微笑むように。

(ちっ……やっぱよくわかんねえ、こいつ)

からかわれたような気がした。けれどその感覚もそれに対する不満も、唐突な眠気のようなものに押し流されてどこかへいってしまふ。

また一段と体が重くなった。このまま瓦礫の中に沈み込んでしまいそうなほどだ。それがどういふことを意味しているのかは、なんとなく察することができる。もうすぐ「0」になる。もうすぐ終わる。

再び暗濁してきたナオトの意識に囁きかけるように、少女の声がすぐ近くで聞こえた。

「助かりたい?」

おかしな質問だと思った。ナオトは笑う。表情はひとつも動かなかったが。

「そ……りゃあ……」

重い瓦礫にのしかかれて持ち上がらない胸から、ナオトは声を絞り出した。掠れて力なく、本当に声になっていったのかわからない。けれどナオトはそのまま続けた。

助かりたいか。そう問われれば、答えは決まっている。

「助かりたい……に、決まってる……」

虚ろに濁る視界を必死に定めて、ナオトは金色の瞳を捜した。

少女はすぐ側にいた。覗き込むようにして見つめる瞳を、ナオトは睨むように見上げる。

綺麗な目だ。吸い込まれそうな金色の水面にナオトの苦悶の顔が映っていた。

その眼を細めて少女は微笑を浮かべた。

「なら、助けてあげるわ。この『ラケルⅡアルカード』の下僕となりなさい」

どこか甘く囁きかけながら、金髪きんぱつの少女はマントの裾を揺らしてナオトの前に屈み込んだ。

一枚の布を羽織っただけの白い肌は月光を受けてなお白く輝く。

陶器とうきの人形のように滑らかな手が、救いを与える天使のようにナオトへと差し伸べられた。冷たい指先が頬ほおに触れる。両手でしっかりと包み込むようにすると、少女はささやかな力で促しナオトに顔を上げさせた。

「その代わり……『蒼』を手に入れなさい。そして私を――」

微かな声でなにか続けて、少女は金色の瞳を長い睫毛が縁取る瞼でそっと隠す。ゆっくりと少女の顔が近づいてくる。薄く開かれた唇は見るからに柔らかで、その奥では真つ赤な舌が濡れていた。

息を吸い込み、少女の口が大きく開かれる。視界を過る一瞬のうちに、ナオトは鋭く光る牙を見つけた。だがナオトがその意味を理解しないうちに、少女の唇が触れる。

ナオトの……首筋に。

直後、鋭い痛みが走った。鈍っていた感覚がこれで最後と言わんばかりに、皮膚と肉になにかが刺さる感触を伝えてくる。全身が強張り、反射的に抵抗しようとした。

だがナオトの体は動かない。もとより動けぬ体をしつかりと押さえ込んで、少女はナオトの首筋に唇を押しつけたまま、そこから溢れ出てくる熱いものを強く吸った。

ごくり、と。なにかを飲み込む音が間近に聞こえた。その音のたびにナオトの意識は急激に遠くなる。

音は何度も何度も鳴って、ナオトからなにかを吸い上げる。

それはまるで鼓動のようにも聞こえて……やがてナオトの意識を完全に闇へと引きずり落と

した。

続きは6月20日発売の富士見ドラゴンブックで！